

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 総合案内

---

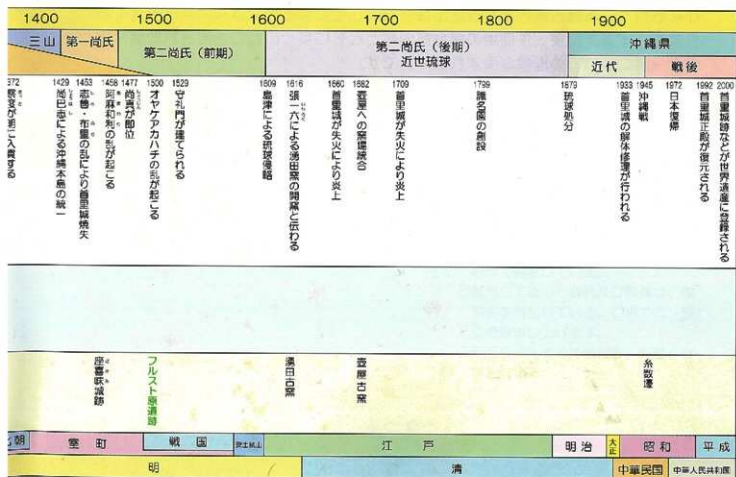
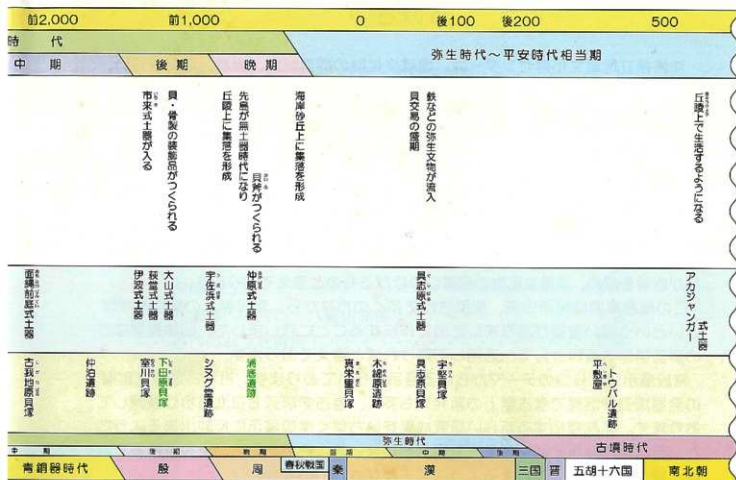
---



# 沖縄の歴史年表

西暦	前50万~1万	前1万~前5,000	前4,000	前3,000
時代名	旧石器時代		早期	前期
沖縄の様相	港川人が現れる 山下町第一期人が現れる		局部磨製石器を使用する 鹿野群式土器が入る	土器の南島化がはじまる 曾根式土器が入る
主な土器型式名			野原第四群土器 爪形文土器	宮川下層式土器
主な遺跡	天城遺跡 洞川インツァー ビンザフ洞穴 山下町第一期穴		野原貝塚 豊真知東原遺跡	
日本	旧石器時代		縄文時代	
中国			新石器時代	

西暦	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300
時代名	弥生時代~平安時代相当期						古く時代	
沖縄の様相	714 倭寇・琉球人が帰朝する このころ陣元遣来が入る		751 鑑真が阿倍孫麻呂に渡来する		土器が無文化化するようになる	1187 謝安天即位を契り、 広大な通しはじめる 陶磁器・石炭・カミイ製が 産出が広まる		このころ琉球国が成立し、 各地に大規模なスクが現れる
主な土器型式名			フェンサ		下層式土器			
主な遺跡	北原貝塚		フェンサツク		カミイ焼石塚群		稲福遺跡	
日本	古墳	飛鳥	奈良	平安		鎌倉		
中国	隋		唐		五代十国	宋	金	元



## あいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、保存、活用を行い、文化財保護思想の普及啓発を図り、県民が郷土の歴史と文化に理解を深め、本県の教育學術及び文化の向上、発展に寄与する施設として、平成12年4月に開所致しました。

埋蔵文化財センターが設置されたことにより、発掘調査から報告書作成などとともに出土品の保存管理が適切に行われるとともに、出土品などの資料を歴史学や考古学などの研究資料として活発に活用されております。それとともに、調査研究の成果を展示や講演会・文化講座など埋蔵文化財について理解を深めるための普及活動を行っております。そのことによって、埋蔵文化財について多くの方々から理解を深め、埋蔵文化財の保護につながるものと考えております。

この総合案内は開所以来、来所された多くの方々から、常設展示の解説書がほしいという強い要望がありましたので作成することに致しました。団体見学などの事前学習の資料として、活用して頂ければと考えております。

常設展示は、9つのテーマからなる展示を行っております。近年、埋蔵文化財の発掘調査が活発で考古学上の新発見も多く、考古学研究も日進月歩に展開しております。年々変化する新しい研究成果をいち早く常設展示に反映出来るようにと、時代順の展示とはせずテーマ展示としました。そのために、常設展示室では展示替えがスムーズに行えるような工夫がなされています。

したがって、数年後には、常設展示がいくつかの新しいテーマで展示替えがなされて、本総合案内書も改定出版されることになるのではないかと考えております。本書が児童・生徒用の総合案内書とともに多くの方に活用され埋蔵文化財の保護についての理解が深まれば幸いです。

平成14年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 知念 勇



## 目次

埋蔵文化財センターの仕事・古代学習室	1
どうして時代がわかるの	2
沖縄にはいつごろから人が住みついたのか	3
縄文時代の暮らし	5
住まいと道具	6
貝の道	7
グスクの移り変わり	9
海外交易を物語る貿易陶磁器	10
沖縄の古窯	11
先史時代の宮古・八重山諸島	12
古代のムラを再現!	13
用語解説	15

表見返し：沖縄歴史年表

裏見返し：沖縄県内の主な遺跡分布図

### 凡例

- 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの常設展示を補完するものとして編集したものである。
- 本書の順序は、展示の各コーナーに沿って掲載している。
- 提供して頂いた資料及び写真は、機関名を明記している。ご協力を、深く感謝申し上げます。
- 許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。



# 埋蔵文化財センターの仕事

埋蔵文化財センターで行っている仕事を紹介します

埋蔵文化財センターでは、つぎのような3つの仕事を行っています。

**1** 発掘調査を行い報告書を作成する

道路や建物などの工事で破壊される遺跡を事前に発掘調査し、報告書を作成する。

**2** 資料や記録を整理して保管する

沖縄の歴史や文化の研究に役立てられるよう、調査で得られた出土品や記録（写真・実測図など）を保管する。

**3** 調査研究の成果を公開し学習に役立てる

調査研究の成果を展示や講演会、体験学習などを通してみなさんの学習に役立てる。

ここからは、普段みなさんが自由に観ることができる、展示室などの紹介をしていきます。

## 古代学習室

実際に観て、ふれて、感じてみよう！

ここでは展示室とは違い、復元された土器や発掘する時に必要な道具、資料を整理して報告書を作成するのに必要な道具を実際に観てさわることができます。また、発掘調査から報告書刊行までの仕事の流れをパネルで紹介しています。



●土器って重いのかな？



### ●発掘道具

- |         |         |
|---------|---------|
| 1. 手鍬   | 6. スプーン |
| 2. ねじり鍬 | 7. ハケ   |
| 3. スコップ | 8. ふるい  |
| 4. 竹べら  | 9. てみ   |
| 5. ブラシ  | 10. バケツ |

# どうして時代がわかるの

時代を知るには、大きく次のような方法にわけることができます。

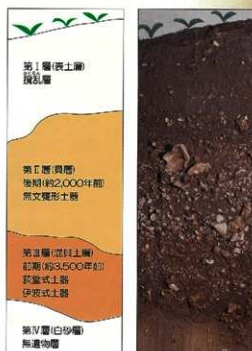
## どちらの土器が古いの？

— 土の層の順序から調べる

遺跡を発掘すると、色の異なる土の層が重なり合っていることがわかります。土砂の堆積は、通常、下の層ほど古いという原理になっています。その原理から、下方の堆積層から発掘される土器などの出土品は、上の堆積層から発掘されるものより古いということになります。このような考え方で出土品の新古が決められたものが**相対年代**です。

新しい

古い



●層の断面写真（崎瀬川貝塚）

## 具体的な年代を調べるには？

より具体的な年代を知るためには、理化学的な方法で行われる炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定法、フィッシュン・トラック法、熱ルミネッセンス法や、年輪測定法など様々な方法があります。これらの方法により今から何年前だと決められる年代を**絶対年代**と言います。

### 試料



### 方法

- ・炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定法
- ・フィッシュン・トラック法
- ・熱ルミネッセンス法
- ・年輪測定法

など・・・

年代決定！



## 土器の型式について

県内各地の遺跡から発掘される土器は、形や文様などの特徴によって型式名が付けられます。伊波式土器は伊波貝塚（石川市）、大山式土器は大山貝塚（宜野湾市）からその特徴の土器が初めて発見され、このような型式名がつけられました。

●大山式土器（久里原貝塚）

# 沖縄にはいつごろから人が住みついたのか

沖縄の旧石器時代は、どこまでわかっているのでしょうか

## 港川人と現代人のちがい



●港川人（レプリカ）

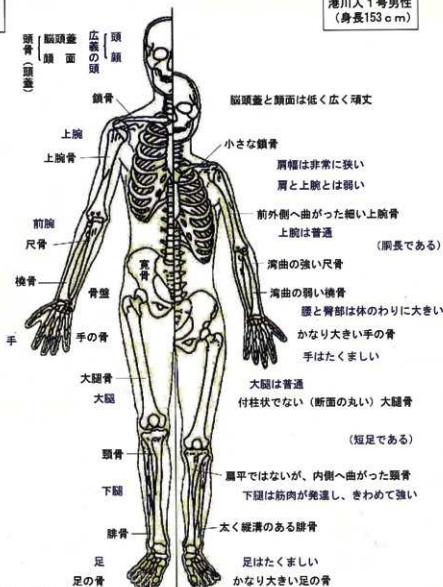
港川フィッシャー遺跡から見つかった人骨のうち、男性の頭骨です。

港川人は今から約18,000年前の人類とされます。港川人と同じ特徴をもっている化石人骨としてインドネシアのワジャク人1号があげられ、日本人の祖先である縄文人につながると考えられています。この港川人には現代人の体の特徴と異なる点がいくつかあります。

例えば、現代人男性の平均身長が170cmであるのに対して、港川人男性は153cmと低いものの、現代人と比べて下顎はがっしりとしていたと考えられています。また、港川人の顔の特徴は、額が狭いこと、眉間が飛び出していること、顔が上下に短いことなどです。

現代日本人男性  
(身長170cm)

港川人1号男性  
(身長153cm)



●現代人と港川人の骨格比較図

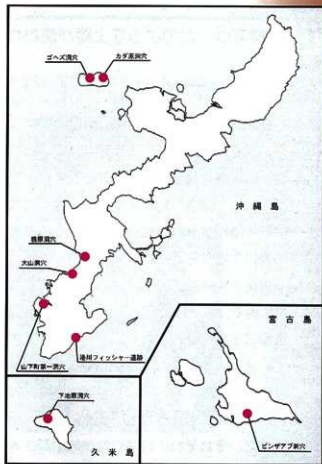


## 旧石器時代の文化

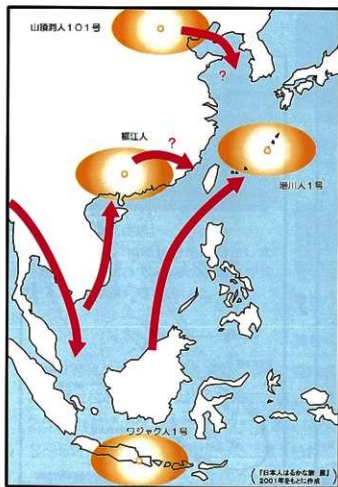
日本における旧石器時代は今から約50,000年前から始まります。土器はまだ使われておらず、打製石器を主に用いた時代とされています。

この時代の沖縄県内の遺跡は、約32,000年前の山下町第一洞穴遺跡など8か所が確認されていますが、石器などの道具類はまだ見つかっていません。しかし、奄美諸島では旧石器と思われる石器が見つかっており、沖縄でも似たような石器が見つかるのではないかと考えられています。

また、この頃の沖縄の気候は寒冷で、シカやゾウなどのほ乳類が生息するなど、現在とは異なった自然環境であり、中国大陆と地続きの時期があったと考えられています。



●旧石器時代遺跡分布図（沖縄）



●旧石器人出土分布図



●リュウキュウジカ化石（ゴヘツ洞穴）  
（沖縄県立博物館所蔵）

旧石器時代の沖縄諸島には多くのシカが生息していました。シカ化石の中には先端を加工したような形跡があることから、「骨器」ではないかと考えられていました。しかし、その後の研究でそのような痕跡のある骨のほとんどは、シカがかんできたものであり人工品ではない、との意見がだされました。

# 縄文時代のくらし

沖縄では、どのような土器が使われていたのでしょうか？

## 沖縄の縄文土器

縄文土器は、土器の表面に縄目の文様（縄文）を施していることからそう呼ばれています。沖縄の土器に縄文を施したものはありませんが、口縁部を山形（波状）につくるといふ縄文土器の一般的な特徴が見られるため、縄文土器の中の地方色の強い土器と考えられています。

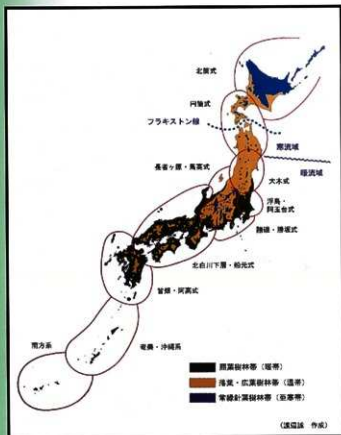
現在、沖縄最古の土器は約6,500年前頃の爪形文土器で、ヤブチ式土器（与那城町藪地洞穴遺跡）、東原式土器（読谷村渡具知東原遺跡）に細分されています。約3,500年前頃の伊波式、菟堂式土器は沖縄独特の土器とされ、独自の土器文化が形成された時期と考えられています。

また、それぞれの時期に九州の土器が入ってきているほか、石器の材料として九州産の黒曜石が移入されており、縄文時代から九州と交流があったことがわかっています。

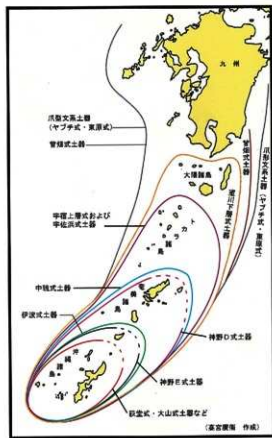


### ●沖縄の縄文土器

写真上は沖縄の縄文土器（古我地原貝塚）で、約4,500～3,500年前にかけての土器です。写真右はヤブチ式土器（野国貝塚B地点）で、6,500年前頃の土器です。



●縄文土器文化圏区分



●土器の島嶼化

# 住まいと道具

当時の人たちの道具や住居を見てみましょう

## 縄文時代の道具

縄文時代は約12,000～2,300年前にかけての時代です。当時の人々は、狩猟採集による生活を行い、身近にある材料を使って色々な道具を作りました。

石からは木を切りたおすための石斧、木の実などをすりつぶすための磨石、石皿を作りました。また、九州産の黒曜石を用いた矢じり（石鏃）が見つかり、弓矢が狩猟具として存在していたものと考えられています。骨や貝からは、針やおもりなどの実用的な用途が考えられるもののほかに、かんざしや小玉といった装飾品を作り、身を飾りました。



●石斧・石鏃  
(シヌグ堂遺跡  
高嶺遺跡)



●骨器（古我地原貝塚）

## 縄文時代の住居



●仲原遺跡の復元住居

仲原遺跡は与那城町伊計島に所在します。発掘調査によって23基の住居跡が見つかり、6基が復元されました。



●竪穴住居のようす（想像図）

シヌグ堂遺跡、仲原遺跡、高嶺遺跡の発掘調査成果をもとにイラスト化したものです。

縄文時代の住居は地面を掘りくぼめた竪穴式住居が一般的でした。現在のところ、沖縄で最も古い住居址は約4,000年前のもので、古我地原貝塚から円形のものが見つかりました。また、2,500年前頃の仲原遺跡、シヌグ堂遺跡からも住居址がまとめて見つかり、そのころの集落は3～5軒ほどの小さなものだったと考えられています。

仲原遺跡などの例から、住居の大きさは一辺が4～6mほどの方形で、低い石積みみの壁に、屋根は柱で椽木を支え、茅ぶきであったと考えられています。

# 貝の道

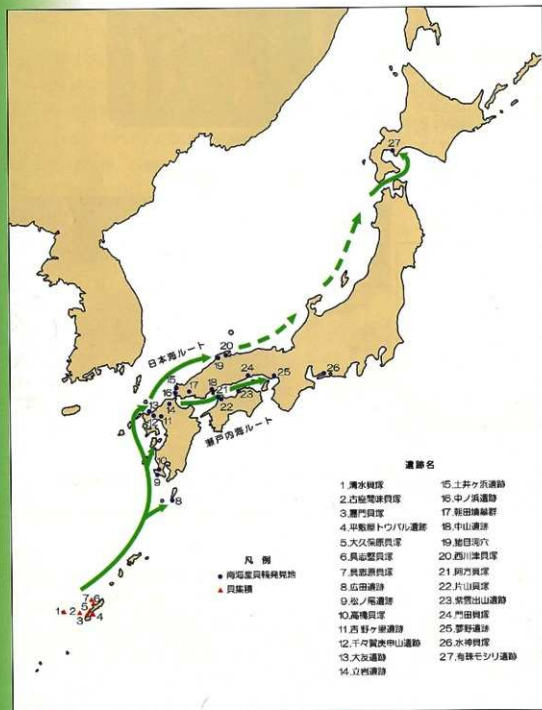
腕輪の材料の貝をめくり、琉球列島の人々と九州弥生人との交易がはじまりました

各地にクニが成立し統治者が現れる弥生時代、北部九州ではゴホウラやイモガイの貝輪を身につけることが、統治者の権威のしるしであったと考えられています。やがて貝輪は九州各地に広まり、遠く北海道まで達しました。この貝輪の材料を求めた九州弥生人と、貝の産地であった琉球列島の人々との交易が展開され、弥生時代中頃には盛んになります。このような貝をめぐる地域間の交易の流れを“貝の道”と呼んでいます。



## ●貝輪着装人骨（立岩遺跡）

写真提供：飯塚市歴史資料館



## ●貝の道

畿内・北西九州・南九州と琉球の人々の間に始まった“貝の道”は、やがて貝の消費地での需要の多様化や運搬が通常化することで、交易もシステム化し、流通経路もより遠くの地域へ延びていきました。

貝集積

(ゴホウラ・イモガイ)  
交易の準備のために集められたゴホウラやイモガイの集積が、沖縄各地の弥生時代遺跡で見つかっています。



●ゴホウラの集積（嘉門貝塚）



●イモガイの集積（具志原貝塚）



貝符

この時代、南海産貝輪の他にも、イモガイ製の貝符が発見されます。沖縄県内で多く発見されていますが、その分布は、北は種子島から南は久米島まで広がっており、もう一つの「貝の道」ともいえます。

九州側からの交易の痕跡として、九州産の弥生土器や鉄製品、ガラス小玉などがみつかっています。中でも最も多いのが土器です。



●弥生土器（阿良貝塚）



●貝輪取り引き場面（シオラマ）



●この頃、沖縄で使用されていた土器（平敷屋トウバル遺跡）



## 貝の文化が栄えた沖縄

九州弥生人との交易を盛んに行っていた沖縄では、貝は食用の他、容器などの生活用品や腕輪・ペンダントといった装飾品などの素材として利用され、独自の「貝の文化」が栄えました。

●貝匙（具志原貝塚）

# グスクの移り変わり

グスクの成立について考えてみましょう

グスク時代は12～16世紀までと考えられ、県内には約300ヵ所<sup>カ</sup>のグスクが確認されています。この時代になると農耕が広まり、各地に按司とよばれる有力者が現れます。グスクの多くはこれら按司の居城と考えられています。初期のグスクは柵を張り巡ら<sup>めぐら</sup>しただけでしたが、次第に石を積み上げた城壁をもつグスクが出現します。そして、グスクは按司の力が大きくなるにつれ巨大化していくようになります。



●座喜味城跡遠景



●野面積み



●布積み



●あいかた積み

## ●石積み

グスクの石積みは野面積み、布積み、あいかた積みの三種類に大きく分けられます。野面積みの代表的なグスクは今帰仁城跡です。切石積みの代表的な大型のグスクは首里城跡、勝連城跡、中城城跡などがあり、特に中城城跡では一の郭と二の郭が布積み、三の郭があいかた積みであることから、幾度かにわたり拡張されたと考えられています。



## ●カムイヤキ（熱田貝塚・我謝遺跡）

カムイヤキとは、徳之島カムイヤキ窯で焼かれたことから付けられた名前で、グスク時代の遺跡から広く出土しています。本土の須恵器に似ていることから類須恵器とも呼びます。

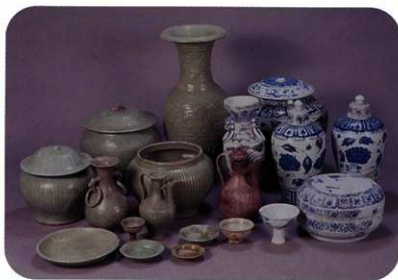


## ●白磁玉縁碗（伊波後原遺跡）

沖縄から出土している中国産の磁器の中でも古い時代の焼き物のひとつで、12世紀のものと考えられています。

# 海外交易を物語る貿易陶磁器

沖縄各地のグスクからは、大量の貿易陶磁器がみつかっています



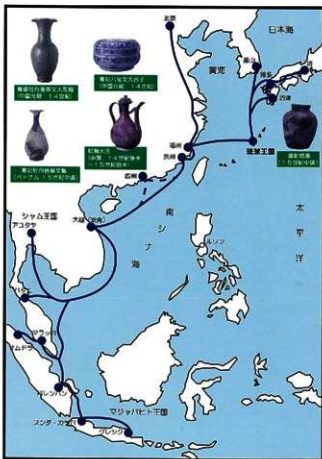
## ●首里城京の内跡出土陶磁器

1994～1997年にかけて行われた首里城跡「京の内」跡の発掘調査で陶磁器などが大量に出土しました。中国の陶磁器が大半を占め、14世紀末～15世紀中頃の貴重な陶磁器であることが判りました。「京の内」跡出土のこれらの資料は国内でも一級品の資料で、我が国の歴史上意義深く、かつ、学術的価値も特に高いものとして、2000年に重要文化財に指定されました。

琉球はグスク時代初期から私貿易を行なっていたと考えられ、12世紀頃の九州や奄美諸島の滑石製石鍋やカムイヤキ、中国産陶磁器などが沖縄各地のグスクから出土しています。

14世紀には主な勢力であった三山（南山・中山・北山）がそれぞれ明皇帝と冊封関係を結び、朝貢貿易を始めるようになります。1429年に三山が統一され琉球王国が誕生すると、積極的に中国をはじめ、東南アジアや日本とも交易が行われ、中継貿易の拠点として繁栄しました。この交易の盛

だった14～16世紀を「大交易時代」と呼んでいます。その様子は『歴代宝案』や『万国津梁の鐘』、各地のグスクから出土する大量の貿易陶磁器からも読み取ることができます。



●琉球王国交易概念図（14C末～16C中葉）



タイ産 中国産

## ●褐釉陶器壺（首里城京の内跡）

褐釉陶器とは褐色の釉薬を掛けた陶器のことで、琉球王国時代には中国やタイから交易によって入ってきています。

# 沖縄の古窯

壺屋以外にも、沖縄の各地に窯が開かれていました

沖縄の陶器製作は、17世紀頃から始まったと考えられています。1616年には尚寧王が朝鮮陶工の張一六、安一官、安三官の三人を招いて指導を受けています。三人の内、張一六は帰化し、陶業の発展に貢献しました。その後、湧田では平田典通や仲村築致元などの陶工が活躍しました。

1682年には今まであった湧田窯、首里宝口窯、美里知花窯の三つの窯が統合されて壺屋窯が誕生します。八重山では、1695年に名蔵瓦窯が窯業を始めています。

現在、県内では湧田窯跡、壺屋窯跡、黒石川窯跡など13の窯跡が確認されています。



●主な古窯分布図



## ●湧田焼（灰釉碗）

湧田焼は、1616年に朝鮮陶工の張一六等を招いて指導を受けたのが始まりとされています。窯場は大きく瓦の窯場、荒焼の窯場、上焼の窯場があり、現在の県庁一帯からハーバービューホテルまでの広範囲にあったといわれています。



## ●壺屋焼

壺屋は1682年の三窯の統合以後、現在まで続いている窯場です。窯は荒焼、上焼とがあり、荒焼（無釉）は主に壺や壺、上焼（施釉）では日用雑器類が焼かれています。



## ●湧田窯2号

1986年から行われた調査により発掘された窯です。窯体周辺から出土した遺物の多くが瓦製作に関わるものであったため、瓦窯ではないかと考えられています。（那覇市立壺屋焼物博物館にて公開展示されています）



# 先史時代の宮古・八重山諸島

独自の文化がはぐくまれていた、先史時代の先島諸島

沖縄本島の南、遥か200km離れた先島諸島（宮古・八重山諸島）は、先史時代には沖縄・奄美諸島とほとんど関係を持っていなかったようです。土器や貝斧の特徴を見ると奄美・沖縄諸島をはじめとする北方の文化よりもフィリピンや台湾など南方の文化の影響を強く受けていると考えられています。

この地域の先史時代は大きく前期と後期に分けられます。前期は約4,000年前～2,000年前で、低い丘の上に住み、刃部を磨いた石斧と、少量の土器を使用していました。後期は約2,100年前～900年前で、海岸砂丘に住み、なぜか土器は使用しなくなり、磨製石斧やシャコガイ製の貝斧が使用されていました。また、石蒸し料理が行われていたようです。



## ●下田原式土器（下田原貝塚）

下田原式土器は約3,800年前の土器とされ、厚手で外面に一对の角のような突起が付いているのが特徴とされます。これまでの研究で南方の土器の流れを汲むのではないかと考えられています。



## ●貝斧（浦底遺跡）

シャコガイの縁番部分を利用して作られた斧です。宮古・八重山諸島で見つかる貝斧の形はフィリピン、マイクロネシアでも発見されていることから、南方との交流があったと考えられます。



## ●石器・骨製品（下田原貝塚）

先島の先史時代人も沖縄本島と同じく狩猟・採集の生活を行っており、石や骨、貝などを利用して生活していました。遺跡からは石斧や、磨石、石皿、骨針、貝製装飾品などが出土しています。



## ●集石遺構（浦底遺跡）

浦底遺跡では焼け石が多く検出されています。土器の出土の見られないこの時期は、石蒸しの調理が行われていたのでしょうか。

# 古代のムラを再現!

2,000年前の琉球のムラ

安座間原第2遺跡・木綿原遺跡の発掘調査の成果をもとに、およそ2,000年前の琉球のとあるムラの様子を再現したものです。貝輪の材料をめくり、九州弥生人と盛んに交易を行っていたこの時代のムラの様子をのぞいてみましょう。

## 住居

当時の人々の住まいは、土を少し掘り込んでつくった竪穴式住居でした。柱や屋根は発掘ではみつかっていませんが、柱を建てた柱穴の跡の大きさなどから推し測り復元しています。



●竪穴式住居址  
(古我地原貝塚)

●竪穴式住居修理の様子  
(シオラマ)

## 食べ物

海 サンゴ礁内で捕れる貝の他、フダイ・ペラ・ハタ類などの魚、海ガメ、シュゴン・クジラ・イルカなども食べていたようです。



●網漁の様子 (シオラマ)



●貝鏝  
網のおもりに使われた貝が貝塚や遺跡で多く見つかっています。



●カメ捕獲の様子 (シオラマ)

陸 発掘では、イノシシの骨や木の実類などが見つかっています。この時代の水田跡は沖縄で発見されていませんが、ミスイモやヤマイモなどを栽培していたかもしれません。



●叩き石・石皿 (古我地原貝塚)



●ミスイモ栽培の様子 (シオラマ)

## 交 易

九州弥生人と交易するための貝輪の材料のひとつであるゴホウラは、水深20m以上の海底にすむ貝です。人々は、交換のために多くの貝を備えていたようで、貝を集めた跡が沖縄諸島の各地で発見されています。



●ゴホウラ採集の様子（ジオラマ）



●貝輪粗加工の様子（ジオラマ）



●貝集積の様子（ジオラマ）

### ●貝輪粗加工品出土状況（平敷屋トウバル遺跡）

弥生時代中ごろに相当する時期の沖縄各地の遺跡からは、作製する途中の粗く加工した貝輪がまとめて見つかっています。時代がすすむにつれ、粗く加工した貝を交易するようになっていったようです。写真はイモガイの粗加工品です。



## 墓

当時の墓は、平らな板石を箱形に組んで遺体をおさめた後、同じ様な板石を使ってフタをするもので、箱式石棺墓といえます。遺体とともに貝をおさめるのは、貝になんらかの呪力をたくしていたと考えられています。



●箱式石棺墓（ジオラマ）

## 用語解説

### 炭素年代測定法 (たんそねんだいそくていほう)

炭素 $^{14}\text{C}$ は、5,730年を半減期として一定の割合で壊れて変化していく放射性同位体で絶対年代を測定する方法。生物が生きている間は常に $^{14}\text{C}$ が補給されるため、生物体内の $^{14}\text{C}$ の濃度は大気中のものとほぼ等しくなる。しかし、生物が死ぬと新しい $^{14}\text{C}$ が補給されなくなり、生物体内の $^{14}\text{C}$ は一定の割合で壊れて変化していく。もとの量が半分になるのが5,730年(半減期)かかるので、試料の $^{14}\text{C}$ の量を測定することで年代を計算することができる。

### フィッシュン・トラック法

鉱物やガラス中のウラン238の偏跡(トラック)を利用して絶対年代を測定する方法。鉱物やガラスの中に微量に含まれるウラン238は長い時間の経過の間に一定の率で核分裂を起こし、鉱物やガラス中に偏跡(トラック)を残す。その偏跡が加熱されると消える性質を利用して測定する方法。

### 熱ルミネッセンス法

鉱物に放射線を照射して得られる光の強さ(熱ルミネッセンス)を利用して絶対年代を測定する方法。鉱物は一度加熱させて発光させると二度と発光しなくなるが、これに放射線を照射すると、その放射線量に比例した熱ルミネッセンスを出す。これを応用して試料である土器の年代を算出する方法。

### 年輪測定法 (ねんりんそくていほう)

年輪を利用して絶対年代を測定する方法。木の年輪は、その年の気候条件によってその幅が変化する。出土した木材の年輪と、現生木の年輪の成長パターンを比較して、重なり合うパターンを組合せて何年前のものか求める方法。

### 港川人 (みなとがわじん)

1968~1970年に発掘調査が行われた具志頭村港川フィッシャー遺跡で発見された化石人骨で、5~9体分の人骨が得られた。調査を行った鈴木尚氏は中国南部の柳江人の特徴に近いとしたが、馬場悠男氏はインドネシアのフジャク人に近いとする意見を述べている。

### 爪形文土器 (つめがたもんどき)

沖縄の爪形文土器は6,500年前のものであるが、本州では10,000年前のものと考えられる。そのため、沖縄のものは本州の爪形文と異なる系譜のものではないかという見方が強くなっている。

### 貝符 (かいふ)

イモガイを方形に割り切って作った札状の製品。特に弥生時代に作られたものは、中国の青銅器に見られる賈彛文の影響を受けたとする見方がある。

### 万国津梁の種銘文 要約

(ばんこくしんりょうのくねのめいぶん ようやく)

琉球国は、諸外国間の掛け橋となるにふさわしい場所と地位を兼ね備えているので、交易により、珍しい産物や宝が集まり国中にあふれている。の意。

### 首里城跡 (しゅりじょうあと)

那覇市首里の丘に築かれた県内最大規模の城。14世紀ごろ蔡渡によって築かれたといわれ、1429年の三山統一から1879年の琉球処分に至るまで琉球王国の政治・外交・文化の中心的役割を果たしている。

### 勝連城跡 (かつれんじょうあと)

勝連町南風原赤吹原に築かれた城。11~12世紀頃に築城されたと考えられ、第一尚氏王朝時代の阿麻和利の居城として知られている。

### 中城城跡 (なかくすくじょうあと)

中城村と北中城村の両村にまたがる丘に築かれた城。首里王府に対抗していた勝連城主の阿麻和利をけん制するために護佐丸が移り住んだ居城としても知られている。

### 歴代宝案 (れきだいほうあん)

琉球王国時代の王府の外交文書、文案をまとめたもの。1424年~1867年までの約440年間の中国を中心とした、朝鮮、東南アジア諸国との往復文書が収録されている。中近世外交史の根本史料。

### 荒焼 (アラヤチ)

沖縄で焼かれる陶器の一種で、無釉(釉薬を掛けない)もしくは泥釉、マンガンを掛けて焼結められた陶器の総称。焼き上げる温度は約1150°C。水甕・酒甕・味噌甕などの大型のものから一合瓶・碗などの小型のものが作られている。

### 上焼 (ジョウヤチ)

沖縄で焼かれる陶器の一種で、釉薬を掛けて焼き上げられる陶器の総称。焼き上げる温度は約1200°C。碗や皿、カラカラ、急須などの日用雑器が作られている。

### 骨角器 (こつかくぎ)

獣・魚・鳥の骨、角、歯などで作った製品の総称。鉾や針などの実用品、髪飾り、腕輪などの装飾品がある。沖縄ではイノシシの骨・牙、シュゴンの骨、サメの歯などで作られた製品が出土している。

## 参考文献

### 石器 (せっき)

石を素材として作られた用具のこと。一般に道具の類を石器、装飾品などの非実用的なものを石製品と呼ぶ場合が多い。沖縄では石斧・磨石・凹石・叩き石・石皿・石鏃などが出土している。九州で産する黒曜石などが出土することもあり、当時の交流の範囲を推定することも出来る。

### 貝類 (かいる)

貝殻を素材に様々な加工された製品の総称。貝彫・貝皿・貝鏃などの実用品と貝礼(符)・貝輪・玉類・垂飾品などの装飾品とがある。

### 高宮聖定編年 (たかみやざんていへんねん)

高宮廣衛氏が提唱した沖縄諸島の土器編年。沖縄諸島の先史文化を前期と後期に二分し、後期を弥生～平安時代に対比させて時期区分を行った。

- 『沖縄大百科事典上中下』沖縄タイムズ社、1983年
- 沖縄県教育委員会『沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会、2000年
- 木下尚子『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』法政大学出版局、1996年
- 国立科学博物館・NHK・NHKプロモーション『日本人はるか旅 展』NHK・NHKプロモーション、2001年
- 国立歴史民俗博物館監修、『模型で見る歴史のドラマ—ジオラマのできるまで—おもしろ発見展シリーズ1、(財)歴史民俗博物館協会、1999年
- (財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『港川人と旧石器時代の沖縄』沖縄県史ビジュアル版2 考古①、沖縄県教育委員会、1998年
- (財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『貝の道—先史琉球列島の貝交易』沖縄県史ビジュアル版7 考古②、沖縄県教育委員会、2001年
- (財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『概説 沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会、2000年
- 高宮廣衛『先史古代の沖縄』南島文化叢書12、第一書房、1991年
- 高宮廣衛『沖縄の先史遺跡と文化』第一書房、1994年
- 戸沢充則編『縄文時代研究辞典』東京堂出版、1994年
- 『復帰20周年記念特別展 琉球王国～大交易時代とグスク～』沖縄県立博物館、1992年
- 『平成6年秋季特別展 サンゴ礁をわたる橋の風—南西諸島の中の弥生文化—』大阪府立弥生文化博物館館誌9、大阪府立弥生文化博物館、1994年

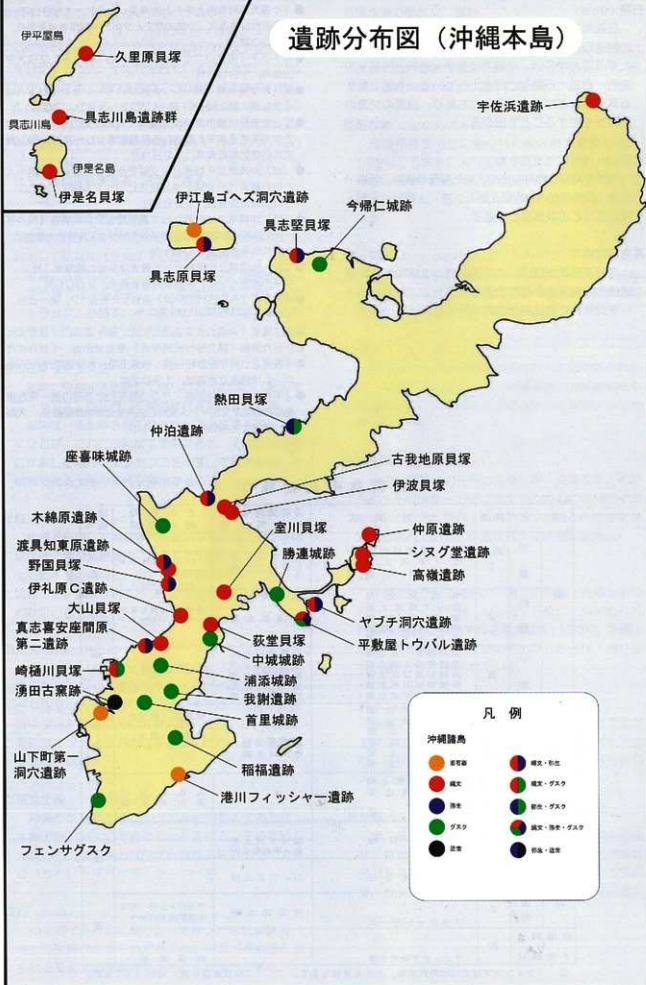
## 沖縄諸島の暫定編年

本土	沖縄	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	現行編年
縄文時代	早期	前期 I 野国第四群 ヤブチ式土器 東原式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6670±140y. B. P. 東原式 6450±140y. B. P.	早
		後期 II 糸原文土器 壺川下層式土器 曾畑式土器 神野A式土器 神野B式土器		糸原文土器 曾畑式土器	
	中期 III	面縄前庭Ⅰ式土器 面縄前庭Ⅱ式土器 面縄前庭Ⅲ式土器 面縄前庭Ⅳ式土器 面縄前庭Ⅴ式土器	旧具志川A式 旧具志川B式 旧具志川C式 旧神野C式 旧面縄前庭式		期
	後期 IV	神野D式土器 神野E式土器 神野F式土器 伊波堂式土器 大壺川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370±90y. B. P. 伊波式(壺川) 3600±90y. B. P.	前期
	晚期 V	壺川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器	中期
弥生時代	後期 I	真栄里貝塚	板付Ⅱ式土器 龍ノ甲類似土器		後期
	中期 II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期 III	アカジャンガー式	免田式土器	アカジャンガー式は 中津野式並行か?	
古墳時代 平安時代	IV	フェンサ下層式土器		類須志器	期

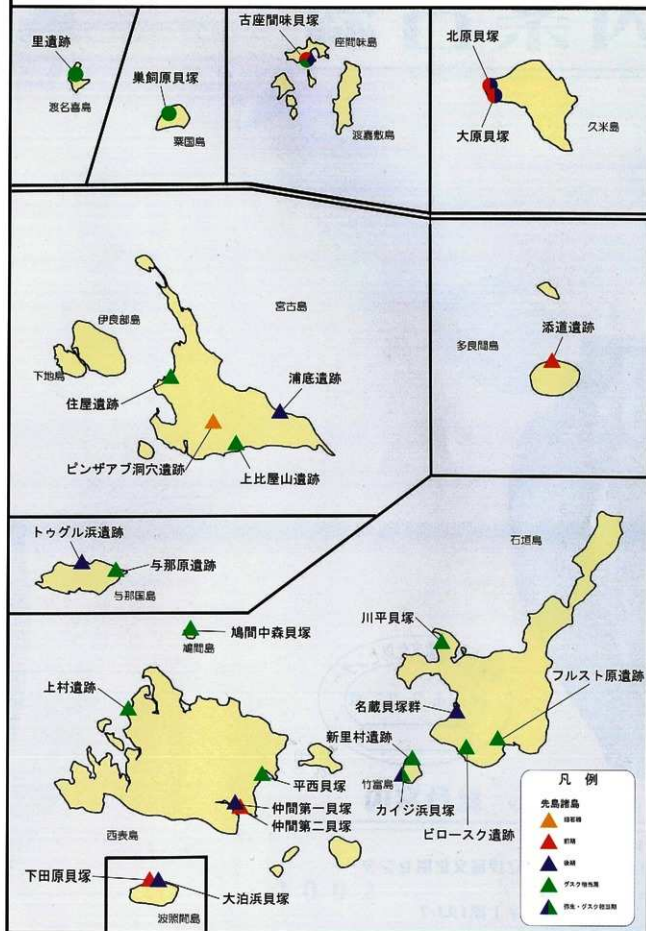
◎ 「フェンサ下層式は縄文時代初期」とする見解もある。

(高宮廣衛作成 1991.4.5 改訂)

# 遺跡分布図（沖縄本島）



# 遺跡分布図（周辺諸島及び先島諸島）





沖縄県立埋蔵文化財センター **総合案内**

2002年3月 発行  
編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125  
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7  
Tel 098-835-8752  
Fax 098-835-8754  
© 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年